表象K1	(参戦者) 服部裕幸	戸田山和久	信原幸弘	美濃正
(踏み絵)				
1-1. 認知プロセスに心的表象は用いられているか。	○&×	○	○&×	○
2-2. 心的表象は、思考の言語である(合成性＋構造可感的処理過程をもつ)か。	○&×	×	○&×	○
2-4. 自然言語は、思考の言語の翻訳か。	○	×	×	PASS
2-5. 自然言語は合成性をもつか。	○	×	○	○
3-1. 分散表象は、文脈非可感的でありうるか(つまり文脈横断的な同一性をもちうるか)。	×	×	○	PASS
3-2. 分散表象は、フォーダーらが言う意味での組み合わせ的統語論と意味論をもつか。	×	×	×	×
3-3. 分散表象は、合成性をもつか。	○	○&×	○	○
3-7. 機能的合成性(functional compositionality)という概念は、整合的か。	○	○&×	○	○
3-7-1. 機能的合成性は、思考の言語の成立に十分な合成性であるか。	○	○&×	○	○
3-8. 分散表象は、機能的合成性をもちうるか。	○	○	○	○
3-10. 分散表象が機能的合成性をもつことの説明は、法則的な説明でありうるか。	PASS	×	○	○
3-11. 機能的に合成的である表象の要素表象は、因果的な効力をもつか。	PASS	×	○	PASS
3-15. 合成性の説明が法則的でない、もしくは要素表象が因果的効力をもたない場合、分散表象のもつ合成性は、自然言語のもつ合成性と同じであるか。	×	○	○&×	PASS
3-16. 合成性の説明が法則的でない、もしくは要素表象が因果的効力をもたない場合、思考の合成性に関する実際の入出力の予測について一致するが別のメカニズムを仮定する他の等値な説明と比べて、コネクショニズムは何らかの優位性をもつか。	○	○	×	PASS
4-1. 認知能力はフォーダーらの言う意味で体系的か。	○&×	○&×	○&×	○
4-2. 体系性は、思考の言語によって説明できるか。	×	○	○	○
4-3. 認知の理論なら体系性を説明できねばならず、				

体系性を説明できるなら表象はフォーダーのいう狭い意味での思考の言語であらざるをえない、というフォーダーらのジレンマ論法は正しいか。	×	×	○&×	×
4-5. 体系性は、コネクショニズムによって説明できるか。	×	○	○	○
4-7. 4-5に「イエス」の場合、その説明は、体系性をさらに基礎的な幾つかの機能へと還元するという意味で機能分析的か。	PASS	○&×	×	×
4-8. 4-5に「イエス」で4-7に「ノー」の場合、体系性は、まさにネットワークから直接に体系性が出現するのか。	PASS	○	○	×
4-10. ネットワークから直接に体系性が出現する場合、認知の体系性に関する入出力の予測について一致するが別のメカニズムを仮定する他の等値な説明と比べて、コネクショニズムは何らかの優位性をもつか。	PASS	○&×	×	PASS
5-1. 表象媒体(representing vehicle)は、言語的記号関係によって、対象を表象するか。	○&×	○&×	○&×	○&×
5-3. 心的表象は、認知プロセスの全体にわたって単一の種類（フォーダーのいう狭い意味での思考の言語であれ、分散表象であれ）であるか。	×	×	×	PASS
5-4. それとも、心的表象には、複数の種類が存在するか。	○	○	○	PASS
5-7. 表象関係は、表象媒体と表象対象との第2階の類似性関係による、というラディカル・コネクショニズムの主張は正しいか。	○	○	○&×	×